

「ブルーカーボン」を知っていますか？

CO₂の新たな吸収源 ブルーカーボン

世界が一丸となって目指すCO₂排出量実質ゼロ。その実現に向けて、JALグループはさまざまな取り組みを続けています。運航に伴うCO₂の排出量削減はもちろん、CO₂の吸収源を守り、増やすこともその一つです。

CO₂の吸収源といえば森林や都市の緑を思い浮かべますが、海草や海藻、植物プランクトンなども陸上の植物同様に炭素を取り込んでいます。

CO₂は水に溶けやすく、海洋全体のCO₂の量は大気中の50倍にもなります。この海水中のCO₂を海の植物が光合成で吸収し、隔離、食物連鎖や枯死後の海底への堆積などで炭素を貯留します。こうして海洋生態系内に貯留される炭素「ブルーカーボン」は、陸上の植物が吸収・隔離する「グリーンカーボン」の2倍ともいわれ、

新たなCO₂吸収源として注目を集めています。

四方を海に囲まれた日本はブルーカーボン生態系の宝庫。海草や海藻の藻場、湿地・干潟、マングローブ林など、多様なブルーカーボン生態系が全国の沿岸や浅海に存在しているのです。

海の森を守れ！ 保全・再生の重要性

2009年、国連環境計画（UNEP）は報告書「ブルーカーボン」の中で、「ブルーカーボン生態系の炭素貯留量は陸上のすべての植物が貯留する炭素量に匹敵する」と記し、CO₂吸収源としての海の可能性を提示しました。同時に、「この貴重な生態系は、年間2〜7%ずつ消失している（消失率は熱帯雨林の4倍）」という報告も。消失により、貯留されていた炭素が大気中に放出されてしまうことも大きな問題です。海の森の保全と再生は、カーボンニュートラル実現へ向けた課題の一つといえるでしょう。

トータル実現へ向けた課題の一つといえるでしょう。

唐津市の海で ワカメの種付け

ブルーカーボンへの期待の高まりから、日本各地で藻場や干潟の造成が進んでいます。佐賀県唐津市と九州大学とJALは、唐津の海におけるブルーカーボンを活用した取り組みを開始しました。2022年11月に、海洋教育に力を入れている佐志小学校と地元漁業者の有志と共に、ワカメ養殖（種付け）体験を実施。みんなで種付けしたワカメは今年2月に収穫できました。ワカメの一部は、当該海域のブルーカーボン生態系を育成するため、収穫せずにそのまま唐津の海に残されます。

「今回のワカメの養殖体験活動のように、産学官民が連携しながら取り組むことで、海洋・環境教育

をはじめ、漁業の持続性、企業の社会貢献など、それぞれの立場においてさらに多くのメリットを生み出すことができると思っています。今後は、吸収したCO₂を企業と売買する認証制度「Jブルークレジット」の認証を目指します」と、唐津市役所政策部の通山誠史さんは力を込めます。

なお、お隣の博多湾でもアマモ場を増やす活動が行われており、藻場が吸収・固定したCO₂を「博多湾ブルーカーボン・クレジット」として販売しています。この取り組みを主導する「博多湾NEXT会議」にはJALも加わり、博多湾を次世代に引き継ぐ活動を支援しています。

JALグループは日本の航空会社として、日本を取り巻く豊かな海を舞台に、これからもCO₂排出量実質ゼロ実現に向けた努力を続けてまいります。



BLUE CARBON

日本で見られる ブルーカーボン 生態系

1.海草の藻場

砂泥質の海底に育つ海草は、海底に巨大な炭素貯留庫を形成

2.海藻の藻場

海面を漂う「流れ藻」は、やがて深海に堆積しブルーカーボンに

3.湿地・干潟

多様な塩生植物や生き物、泥の中の有機堆積物が炭素を貯留

4.マングローブ林

樹木として炭素を貯留する他、海底の枯れ枝や根もブルーカーボンに



上／ロープに一つずつ種付け。下／収穫されたワカメ。



唐房漁港でのワカメ収穫作業の様子。

JAL カーボン オフセット

カーボンオフセットとは、排出されたCO₂を他の場所で吸収したり、削減したりすることによって埋め合わせる仕組みです。JALグループでは、ご搭乗いただく飛行機が排出するCO₂をオフセットできるプログラムを設置しています。詳細はJALカーボンオフセットのWebサイトをご覧ください。



今回のテーマに該当する目標



2015年9月、全国連加盟国(193カ国)により「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)」が採択されました。2030年までに、貧困や気候変動、平和的社会などの17の目標を達成すべく、JALグループも社会の課題解決に取り組んでいきます。

